

仏教とは何か(下)

2000年12月3日 岡本英夫先生

(十) 真実と方便^{ほうべん}

その教えを大きく分けましたら、真実の教えと方便の教えの二つに分けることもできるでしょう。「真実」と「方便」と、二つ出されましたら、みなさんどっちが欲しいですか。こんな問いは本当はよくないんですけども。

私はですね、方便なんてどうでもいいんだ、とにかく真実が欲しいんだというわけで、方便の教えなんか見向きもしなかったんです。けれどもそういうのはまったく仏教に反する、私自身の間違った考えにすぎなかったんですね。

方便という言葉は大きな誤解を生んできたんでないかなと思います。方便は何^な故^ぜか嘘^{うそ}と直結しているんです。「嘘も方便」と言われるんですから。

これが困るんです。どうして方便が嘘という意味になったかと言うと、悪いことに、まさに「嘘も方便」という事実が現実には沢山あるんですね。だからちょっとややこしいんです。

なぜ「嘘も方便」という言葉が生まれたのか、そこはよく分かりませんが、一つの可能性として「有相^{ゆうそう}方便」からきたと言えるでしょう。有相と言うのは姿、形です。具体的なものです。有相という言葉に対して無相^{むそう}ということがもちろんあるわけで、これは姿、形がないということです。目で見ることができない。

私達は、私の思いというか人間の思い、持ち前の私自身の思いや考え方で、真実というものを見て真実とはこうだと言うことができないんですね。次元が違うのです。目の前に真実をドンと置かれても何の反応もしないんですよ、私達は。真実に会いたいといくら思っている、真実がわからないから、目の前にあっても出会ったことにならない。

しかし、それならもう絶望的かと言うとそうではないんです。真実の方から私に近づいてきてくれる。それが宗教ですね。真実の方から近づいてくるその姿を方便と言うんです。そもそも方便というのは、漢字で訳した言葉ですね。もとの言葉の意味から言えば、「近づいて説く」ということです。近づくと言うのは、

距離的に近づくということではなくて、真実そのままでしたら私達に分かりませんから、私達に分かるようなものとなって、現れてくださるということなんです。

仏様の真実なるお心、それは私の方から考えようとしても分からない。それなら私はもう真実に会う事はできないのかというと、そうでなくて、実は真実の方が私に近づいてきて、私に分かるような教えとなって説いてくださる。そのようなはたらきを方便と言います。だから方便は真実が相を持ったんです。真実そのものが私に分かるような教え、私に通用するような教えとなったのです。

私に通用するような教え、具体的な言葉、そういう意味での姿、言葉というのは一つの姿です。具体的な現れですね。何も言わなかったら分からない。言葉に出せばよく分かるんです。それが相ですね。だから無相である真実が有相、相を持った、それを方便と言います。だから方便は必ず有相方便ですね。

そういうわけで、「有相方便」は、本当に素晴らしい言葉なんですけども、これがなまって「嘘も方便」になったのではないかなと。「有相方便」、「有相方便」と何百年間も言っていたら、その内、「嘘も方便」になってしまう感じもします。「有相」よりも「嘘」の方が私達にとって遙かに馴染みのある言葉ですから。

このように方便というのは私に分かるような教えなんですけど、その方便の正体は何かと言えば、これを一皮むくとそこに真実があるんです。真実が私の為に方便となって現れてくれているんです。だから最初の、真実と方便、どちらが大事ですかという問いは間違いということになります。

真実も方便も、その正体は同じものです。私達が教えを聞いて歩いていくのは方便の世界です。それでは真実の教えはどうなるのかと言うと、方便の歩みをしていくその歩みのところで、真実を頂く事ができるんです。そういう関係ですね。

私達の思いは、方便なんてどうでもいいんだ、真実の世界の中にドボッと浸かってしまいたいような思いがするかもしれませんが、それはできないんです。人間というのは煩惱の存在であり、心深く、どこまでも深く闇を持っている存在ですから、そのような者が完全に真実な状態になることはできない。だから仏教の教えは、真実と方便と二つに分かれている。方便が私達が具体的に歩いていく道を教える。これは一生涯の道ですね。昨日も今日も明日もそういう歩みを続けていくの中で、真実というものを頂戴していく。こういうことなんです。

(十一) 方便の教えは私を照らし出す

光りが闇を照らすということを言いました。どうでしょうか。お互い、自分という存在が闇の存在だと思えますかね。ネアカ、ネクラの意味で暗いというのではないんですよ。それとは一切関係ありません。

闇ということ、方便の教えの中で大きく二つに分けて言います。具体的にはもちろん数えられないようなものなんでしょうけども。一つが、自己肯定ですね。自己肯定の私を知らそうとする教えです。

自己肯定、自分はこれで善いんだと思って肯定している。この場合の自己というのは、他の人に対する自己ということもあるんですが、ポイントは、仏に対する自己ですね。私がついて、他の人が沢山いて、この人達に対して自己中心という意味ももちろんあるわけなんですけど、より深い問題は、仏様に対して私が自己中心なんです。ですから人間中心と言ってもよいかもしれませんね。自分の方を中心にし、自分の方を肯定しているわけです。ということは言い換えましたら、仏様を脇にやって自分を中心に据えている。即ち、仏様を否定しているわけです。真実である仏様を否定しているんです。そして自分を肯定している。自分を中心にし、自分本意に生きていこうとするわけです。

そうしますと、当然のことながら仏様の教えというか、仏様のはたらきというものは私にとって必要ではありません。自分には自分の考えがあるし、生き方があるわけで、それで人生大丈夫、間に合っているというわけですね。

照らすというのは、そのような自分の姿を教えが私自身に知らすのです。教えによって、闇が光によって照らし出されるように、自己中心という闇、自己肯定という闇を知らされる。本当は、自分を中心にして生きる事のできないような存在なんです。本当は、私という人間は、決して肯定されるべきものではなく、何が肯定すべきものかと言えば、それは仏様の真実ですね。この世界で一番中心のものは仏様の真実です。これをこそ肯定しなければいけない。しかし私はそうでなくて、その仏様を脇にやってなき物にしてこれを否定し、私自身の考えというものを肯定して、自分中心に生きている。そのような姿を闇と言ったんです。

大雑把に言いましたらね、仏教の教えは自分を目覚めさそうとする教えです。仏教の教えに出会っていない時は、自己中心、自己肯定であって、しかもそれを

何とも思っていないんですね。当然のようにしている。だから、仏教の教えを聞きに行きませんかと誘われても返事をする必要もないわけです。問題になってこないんですね。どうしてあなたは、そんなおかしなことを言うのかと、言い返されるくらいのものです。

ところが、もし聞き始めるようになると自分が知らされてくる。仏教の教えというのは、そういう力を持っているわけです。基本的には、先ほど申しますように、真実そのものがそのような具体的な教えとなったんですから、その教えのいろいろな言葉や表現の奥を^{たど}っていくと真実に至るんですね。だから教えを聞くということは、真実のはたらきに少しずつ、少しずつ触れていっているということになるわけです。自分というのはこういう存在であったのかということがはじめて知らされてくることになります。

一番最初は、仏法なんてまったく関心のなかった者が、実際に聞いていくようになるその因縁というか、きっかけですね、これは具体的に大事なことだと思えます。おかしな言い方ですけども、使える因縁は何でも使って、何とか人を仏法の場に誘いたいですね。そして又、誘える仏法の間というものが具体的にないと困りますから、あちらこちらにいろんな場を作っておくことが大事ですね。どこかにぶち当たるということがありますから、そういう因縁が本当に大事になってきますよね。少し乱暴な発想ですが。

(十二) 南無阿彌陀仏が真実

方便の教えのまず第一が、そのように自己肯定の自分を知らされるということです。この世界に南無阿彌陀仏という真実があるのに、私という人間は、まったくそのことを何とも思わずに、自分の小さな見だけで自己も世界も考え、それで全ていいんだと思って生きてきた。本当にそれは間違っていた。生きる基盤のところから基本的に自分は間違っていたということを、だんだんと知らされていくんですね。

さっきも言いますように、知らされ初めの段階は多少しんどいんです。ここが第一の関門のようなものです。ここでやめる場合が多いかもしれません。だから仲間を作っておくということが大事になってきます。道から外れそうになったら、

仲間から「どうしてるかい、一緒にやっぺいこう」と声がかかり、それによって見失っていた道に再び立ち帰ることができるのです。

この第一の方便の教えの目標とするところは、私自身が何であるか、そして仏様というものが何であるかということが一応はっきり分かることなんですね。当初は自分が万能であると思っていた。しかしそうではない、私というのは本当は間違った存在なんだということが次第に分かってきて、それなら何が真実かと言ったら、正にこの仏様の南無阿弥陀仏のはたらき、これが真実だったんだと分かることなんですね。南無阿弥陀仏という真実の願いがこの世にあったんだと分かることなんですね。それがこの段階の一応の目標です。そこまで歩いていくことが大事です。

そうになりましたら、その人はいよいよ自分というものをはっきりさそう、南無阿弥陀仏の教えをいよいよ聞いてゆこうと、聞法、つまり仏法の教えを聞いていくことをどんどんとやっていくようになりますね。

仏様の呼び覚ましというのは、それは智慧のはたらきですが、智慧は私の闇というか真実でないところを照らし出すんですね。その真実でないところというのが、自己中心のところ、自己肯定のところ、いわば闇ですね。

闇の「部分」というよりも、私の全体が闇の存在だということです。闇の私を照らされていく歩みをやっていく。そこがですね、常識で考えればおかしいと言うか、不思議なもんだなあと思います。私達の普通の考えは、いわゆる向上の道なんですよ。どんどんと向上していこうと言う、いわゆる右肩上がりですね。練習し、訓練し、鍛練し、努力して頑張ってどんどんと上へ上がっていくわけです。時間を追うごとにね。人生というものそんなものだと思っている。

ところが仏教の道というのは、これとは違うんですね。その教えを聞いて何がどうなるかと言ったら、私自身の正真正銘の姿が私に分かってくるんです。自覚されてくるわけです。その自覚された本当の私というものが、実は自己中心、自己肯定という、まことに粗末な真実ならざる自己なんです。そういうものが知らされてくる。そして更に知らされ更に知らされるという歩みですから、当初考えていた向上ではありません。どう言えばいいか、下の方にいってしまうようなものです。

だから聞き初めの頃は、それがよく分からないんですね。私が聞き初めの頃、一週間の会に出たことがあります。隣に八十何才かのおばあさんが座っていました、一週間ずっとそのおばあさんと一緒でした。大体そんな高齢の人と生活を共にするということがない。私はそこで説かれる教えがほとんど分からないんですが、そのおばあさんはしょっちゅう頷いて、申し訳有りませんと言うんです。「へえーっ」と思っていましたね。

座談会というのがあって、そのおばあさん、本当に自分は申し訳ないということをしてそこで言うんですね。申し訳有りませんなら、なんで一週間もいるのか。申し訳有りませんということを一週間言い続けるとはどういうことなんだろうかという感じですよ。私は、申し訳有りませんという自分を見たくないわけです。申し訳有りませんと言うような自分ではないんだと思いたいわけです。そういうのは向上の発想ですね。

聞法というのは、そのように、申し訳ありませんと仏様にお詫びをすべき自分であるのに、そのことに気づかず、仏様を無視してひたすら向上していこうとしている、それが自分なのだということを知らされていく歩みなのですね。

だからどうでしょうかね、初めのうちは何とかお互い声をかけ合い誘いあって、実際にできるだけ沢山の教えというものを聞いていくことが大事でしょうね。人工衛星を軌道に乗せるには、初めは強力なロケットで打ち上げないといけない。それがなかなか難しいんです。時々失敗する。本当に軌道に乗るまで頑張っていきたいですね。

教えを聞いていって自分というものを知らされ、申し訳有りません南無阿弥陀仏と言って元気の出る世界なんです。実に不思議な世界ですね。普通、申し訳有りませんと言っている人がいたら、お前はダメなやつだと言いたいわけです。しかし、仏法者は、申し訳有りません南無阿弥陀仏と言いつつ、ものすごく明るく元気なんです。そのようなものが私達が歩んでいく聞法の道ですね。

午前中は、南無阿弥陀仏というのは呼びかけであり、私を呼び覚ますはたらきであるということをお話したところでした。その仏様の真実の智慧によって呼び覚まされる。ちょうど光りが闇をうち破っていくようにですね。光りというのは

具体的には教えですね。教えを聞いていくことが光りによって照らされていくということで、ここのところが大変大事になってくるわけです。

仏教にはその文字からいってポイントが二つあります。仏と、教えですね。私が目覚めることと、そして私を目覚めさせるのは教えによるんだということですね。仏教全体の位置付けから言いましたら、教えには真実の教えと方便の教えとがあって、私達が実際に聞いて歩いていく世界は、方便の教えによる世界なんです。姿を持たない真実なるもの、つまり仏様が、私に対して具体的な私に分かる教えとなつて私に近づいて教えを説いてくださるんですね。そういうはたらき、近づいて説くということを方便と言います。

近づいて説く教えの具体的な内容は、大きく二つに分かれる。二つの段階と云っていいかもしれません。最初が自己中心、自己肯定の私というものを照らし出すはたらき。私の方から言えば、自分を知らされていく歩み、これが正真正銘の自分だったんだということを知らされていくのが私の歩みなんですね。

普通私達が考える向上の道というのは、自己中心、自己肯定の自分には気づかずに、むしろ、まさに自己肯定の自分を肯定して、自分というものをより善くしていこうという発想に基づいていくわけですね。教えに照らされてみれば、自分というものはとてもそのような善いものではない。その現実の自分に立ち帰って歩むことをせずに、そこに目を向けず、より善い自分になっていこうというわけです。

それでは本当の私達の歩みというものにはなりえないわけです。本当の歩みというのは、正真正銘の自分、飾らない自分、作らない自分というものに目覚めていく。真の自己に帰るということです。それが私達の歩みなんです。ですから、この生き方は人間の常識に真っ向から反するようなものになると思います。これが、第一番目の内容でした。

(十三) 悪人

ところで、自己中心、自己肯定の自分のことを表現するいろいろな言い方があります。「悪人」という言葉はよく知られていますね。この言葉は『歎異抄』^{たんにしやう}という書物の中で使われていま。親鸞という人が生前、沢山の教えを説いてこられ

た。その晩年、親鸞聖人に付き添っていた若い唯円^{ゆいえん}という弟子がいました。その唯円が親鸞聖人が亡くなって、しばらく経って、親鸞聖人は生前、こういうような事をよく仰っておられましたということを書いたのが『歎異抄』という書物です。

その中に「悪人」という言葉が出ます。これは一寸注意をしないといけない言葉なんです、教えによって知らされ、明らかになった自分を見てみると、その内容から言って悪人としか言いようがない自分なんだということです。

これは、親鸞聖人がご自分の事をそう仰^{おっしゃ}ったんです。決して善人とは言えない自分、悪人としか言い様のない自分。これは仏教の教え、真実の教えによって照らされて見えてきた自分を自分自身で言った表現です。

そこがポイントであって、仏教ではない、いわゆる世間の教えというか、そういうものによってはなかなか本当の自分が悪人であるという自覚までは行きにくいわけですね。仏教の教えだからこそ人をして、そのように目覚めさせる力があるわけです。そして又、自分で自分を表現した言葉ですから、人のことをあなたは悪人だと言っているのではないんです。それぞれ、その人その人が教えによって知らされた自己をどう呼ぶか、私はもう私自身のことを悪人としか言い様がない。そういう自分自身の言葉なんです。

こういうような形で自己中心・自己肯定の自分、即ち、仏の存在を無視し、仏が私にはたらきかけている願いを無視して生きている私のことを一言で表現しているんですね。

そのように自分というものが悪人というようなものであるということがだんだんと明らかになって、それに対して、仏様あるいは南無阿弥陀仏というはたらき、これこそが真実だったんだと、この対比と言いますかね、私は悪人、真実ではない存在、真実は実は仏様であった。初めは自分自身の方を真実と思っていたわけですよ。しかし、決してそうではなかった。自分が悪人としてはっきりしてくるわけですね。こういうことが知らされていくのが、さっき言いました、一応第一の教えの目標とするところですね。

(十四) 南無阿彌陀仏を私有化する

もう一つ、第二の教えというのがあって、これがなかなか分かりづらいところかもしれません。今はそんなに詳しく申し上げようとは思いませんが、順序から言って、こちら(第一)の方が最初に気づかれてくる自分自身の問題なんですね。しかし、自分はこのような存在、真実実は仏様の方こそであると一応^{うなず}頷く事ができても、それで万事解決したというわけではないんです。もっともっと私達の存在の闇^{やみ}は深いことが、いわば第二の教えによって示されます。

私たちの二番目の問題、即ち人間存在の最深の問題と言っていいかもしれない。それは、南無阿彌陀仏、仏様の世界が真実であることがわかってきた、そしてそう思って毎日がんばってやっている、ところがじつは、私の心の深いところで南無阿彌陀仏を私有化するという問題があるんです。

私有化するというのは、自分の所有物とすることです。本来の生き方は、仏様の大きな世界の中に私自身を見い出していくわけですね。仏様の方が遙^{はる}かに大きい。比較を絶している。その大いなる世界の中に私が生きるというのが本来の位置関係です。

ところが、その逆に、私の思いの中に仏様というものを位置付けてしまう。仏様の方が小さいわけですよ。小さくしている。「私」、「俺」という自分の意識の方が大きいわけです。だから、仏様、南無阿彌陀仏が真実だと思ってはいるけれども、観念的に思っているだけであって、我が身の事実になってないわけですね。「あなたにとって何が真実ですか」と問えば、それは仏様ですと、答えることはできる。けれどもその人の生きている実際は自分の方がやっぱり真実になっている。一応は分かっているんだけど、このような状態がずっと続くんですね。

そういう問題があって、これはある意味で底なしなんです。では、その自分に気づかないのかといえば、非常に難しい。しかし教えを聞きぬいていくことによって次第に気づくようにはなる。しかしまた、一度気づいても次ぎの日にはまた元に帰っているといった具合です。それ程私達の闇^{やみ}は深い。その深き闇の自己を、生涯限り無く知らされてゆくのです。

(十五) 智慧と慈悲

南無阿弥陀仏は私を呼び覚ますはたらきである。これが智慧のはたらきですね。生涯その智慧の光り、教えを頂いていくわけです。しかし、その智慧のはたらきだけが南無阿弥陀仏ではなくて、私を呼び覚まして生かすんです。私を生かすはたらきがあります。

仏教と言えは智慧と慈悲の世界ですね。一般には特に慈悲の方が印象が深いかもしれませんが。そこで、智慧と慈悲とどっちがほしいですかと、これも又愚かな問いですが、私でしたら智慧は何だか嫌な感じがします。グサツと言い当てられるようで、怖いようで、甘えておれないようで、ですから慈悲の方がいい。慈悲と言うとどんなイメージがありますかね。ホンワカした柔らかい、優しいそんなイメージが起こってきやすい。智慧はやっぱり厳しいですね。

これも又、私自身の誤解だったんですが、慈悲というのは、ただ優しいとか、柔らかいとかそういうようなものではないんですね。そのようなことは仏教が言ってるのではなくて、私がかってに思っただけなんです。そのようなことは他にもたくさんある感じがします。仏教の言葉を、仏教がどう言っているかということは忘れて、いつのまにか勝手に自分で解釈・判断しているんですね。このことは教えを聞いていく上で注意しなければいけないところでしょう。

そこで、慈悲のはたらきということで、具体的な内容で一番関係を持っている言葉をもしあげようとするれば、「願い」でしょうか。もう少し視点を変えて今日の言葉で言えば主体性というようなものです。これも勝手な解釈になってはいけません。

南無阿弥陀仏は、その智慧のはたらきによって迷い深い私を呼び覚まして、本当の私に目覚めさせ、その慈悲のはたらきによって、私たちに、願いに満ち主体性を発揮して生きる歩みを生み出してくれる。午前中申しましたように、人は本当の自分に目覚めていけばいく程、力を発揮するんです。この道理です。自分に目覚めればそれだけ力が発揮できる。そういう道理があるんだということを仏教は見つけたわけです。

光りのはたらき、即ち教えによって人々に真の自己を知らしめて、その人を生かしていく。生かしていくということは、その人自身の中に願いというものを起

こしていく。自分自身の一番深い願い、一番深いところで願いを起こし、その願いが原動力となって力強く生きていくようになるわけです。

(十六) 私自身を生きる信心

仏教というものを表わす、ある意で一番象徴的な言葉は信心ですね。信心というのはそのような意味で願いなんです。願いは信心の持っている一つの側面ですね。自己に目覚める、南無阿弥陀仏に目覚めるという、目覚めた心を信心と言いますが、同時に目覚めというのは願いとなって展開するのです。

自己とは何か、仏様とは何か、南無阿弥陀仏とは何かということが段々と分かってくると、それだけ、その人に願いがおこってきます。その願いは、正に明らかになってきているその自分自身を生きていこうという願いです。かつては自分が嫌だった。しかし、自分自身を引き受けて、この世界と一つになって、自他を怨まず、自暴自棄にもならず、現実を受け止めつつ、南無阿弥陀仏の願いをさらに明らかにし、同時にどうか一人でも多くの人が南無阿弥陀仏に気づいてもらいたいという願いを根底にして、世間のことに疲れることなく取り組んでいく人が生まれるのです。

初めは隣の芝生が綺麗きれいに見えるわけですね。何故か綺麗に見えます。それならと言って、隣に行ってみたら、芝生に穴が一杯あいているわけですね。けれども遠くから見たら、綺麗に見えるんです。大丈夫です。向こうもこっちを見て綺麗だなあと言っていますから。(笑)

以前は、あのような綺麗な、立派な、有能な、力のある人に自分もなればいいと羨うらやんで思っていたけれども、そうじゃない。私が生きるんだから、正に嘘偽うそいつわりのない自分自身を生きればいいんです。信心というのは自分を引き受けて生きていくことができるようになるんですね。もうそれだけで、生き方が大きく変わってくるわけです。

信心の問題で困ったことの一つは飾るということです。私達は自分をよく見せようとして飾ります。一番困るのは、仏様に対して飾るんですよ。仏様に対して飾ればですね、もう仏様以上のものはありませんから、これほど嘘をついている

ということはない。世界中に向かって嘘をついたようなものですから、自分で收拾がつけられないんですね。

信心は、飾る心を超えて、正に正真正銘の自分自身に立ち帰らせる。そのように信心は目覚めです。自己と南無阿弥陀仏が明らかになる。明らかになった心を信心と言うんです。決して何かを信じ込むような心ではないんですね。明らかになるところに必ず願いがおこるんです。

(十七) 大乘の願い

その願いは経典の中で、はっきりと述べられています。ある経典では、主人公がお釈迦様から教えを聞いていって、そして遂に自分自身に目覚め、仏様に目覚めてゆく。信心が生まれる。そうするとその人は、信心成就した直後に何を言うかという問題があるんですね。これは面白い問題です。私ならどう言いますかね。信心成就した、ああよかった、これで楽になったと言うかもしれませんね。もしそうであれば、自分の個人的な安らぎのようなものを私は求めていたということになります。

ところが、仏教は、個人的な安らぎを求めるのが仏教だとは決して言いません。経典の中に登場し、教えによって遂に信心成就した直後の人達の第一声は、じつに他の人々に対する願いです。私はこのようにしてお釈迦様から教えを聞く事ができました。しかし、これから生まれてくる他の人達は一体どうすればいいんでしょうかと。こういう関心、問いがおこってくるんですね。そこに大乘があります。

大乘、大きな乗り物ですね。人の道というのは自分一人だけが救われて、それでよしとするものでは決してなくて、皆が一緒に歩いていく。お互い声をかけ合ってやっていこうという、そういう願いがおこる。大乘の願いですね。また、誰でもいつでも何処でも、南無阿弥陀仏の教えを聞いていくことができなければ本当の道ではない。その普遍の教えは何かを問うのです。皆が生きることのできる教え、道を問う。それが大乘の願いです。

もちろん、この道は真実であると先ず自分が証明しなくてははいけません。この教えを聞いて歩いてよかったと。そうすると、次ぎなる人に声をかけていくわけです。そして自分も更に歩むんです。自分も歩みつつ次ぎなる人に声をかけてい

くんですね。そのような願いというものがその人の中におこってくる。これが信心が持っている必然のはたらきなんです。目覚めるということは、願いに展開していく。

(十八) 主体性

その願いを主体性と申しましたけれど、正にその願いのところに私というものがあるわけですね。ですから、仏教というのは決して何か借り物というものではないんですね。

自力、他力という言葉があります。この言葉で私達は実際のところ随分惑わされているという感じがします。振り回されているんですね。この字を見ると、自力は自分の力、他力は他人の力と、普通こうなってしまいうんですね。それは、もちろん無理はありません。自力・他力はもともと世間で使っていた言葉ですから。

そこで大事なことは、これを仏教が取り入れたときに、何を自力と言ったか、何を他力と言ったか、そこを確認しないといけないわけですね。自力というのは自分の力には違いありませんが、具体的な中身があるわけですね。それは自己中心の力、自己肯定の力、自分でものの善悪が何でも分かるんだという思いですね。他力というのは仏様の力です。南無阿弥陀仏が他力です。ここを踏まえれば、この言葉は随分使いやすい言葉だと思います。しかし実際は、なかなか本来の意味で受け止めてこられなかったようです。

そうしますと、仏教というか特に念仏の教えというのは他力によるんだというわけですから、他力によると言えば何か他の人の力によるのであって、自分の力はどうなるのかという疑問が起こったりするわけです。自分のこの力は一体どうなるのか。もう何の用もないのか。何か他力というのをもらって、それで生きていくとなったら、他力に誘導されたロボットのような感じでしょう。私の思いの中には、そのような問題がやっぱり残るんですね。

他力は仏様の力です。南無阿弥陀仏の力ですね。その南無阿弥陀仏のはたらきを受け止めたのが信心で、それはその人自身のものとなって、決して借り物ではないんです。正にその人の主体なんです。自己に目覚めていくということは、借り物の意識とか認識とかいうものではないですね。まさに本当の自分の認識ですね。そしてそこからおこってくる願いも借り物の願いではありません。自分の

願いです。はっきりと人を主体的に生かしていく。仏教はそういう事を明確に言っていくんです。

私にとって、仏教が面白くない、やる価値がないと思っていた理由はいくつもあったんですが、その内の一つがこの主体性の問題でした。人が生きるんだから主体的に生きなければダメなんだと。その思いが強く前提にありました。ところが仏教というものを見てみると、なぜか主体性というものを感しないんですね。もし若い人達が、主体的に元気に仏教をどんどんやっている雰囲気がこの日本に満ち溢れておれば、それはもう初めから認識は違っていたと思います。

しかし、それは、明らかに私に見る目、感じる力がなかつただけのことで、実際仏教に触れていってみれば、仏教ほど人を主体的に生かすものはないということを知らされてきました。そこのところはもっと強く言うべきではないかという感じもします。そうでないと、ひょっとすると、以前の私と同じように、若い人たちにやろうと言う気持ちが起こってきにくいのではないかと思うんです。民主主義の時代になればなる程、そうでないかと思います。

そのように主体的な願いに生きる、そこに信心がはたらいているわけですね。その願いが大乗の願いですから、自らなんとしてでも尋ねぬき歩みぬいていこう。そしてできる限りの配慮や工夫をして、人々にこの教えを伝えていこう。その願いで今日も一日生きていこう、となるのです。

私のことで恐縮ですが、仏法にまったく反発していたような私が、なぜその仏教を聞くようになったかと言えば、もうそれは間違いなく、向こうの方から、つまり、いろんな方が心を込めて「仏教をどうぞ」とわざわざ勧めてくださったんです。私の方から探し求め、かき分けて聞こうとしたことなど一度もありませんでした。向こうの方から、どうかとこれをと勧めてくださった。そのお勧めがなかったら、おそらく一生涯聞くことはなかつたろうと思います。まったく無視していただろうと思いますね。

そういうわけで、私自身はこれから何をしようかと考えた時に、やはりあの出発点だという思いがあるんです。要するに「仏法に出会える機会」なんです。仏法に携わっている者の方が、こういうものがあるんですよと、自分に閉じこもらずに、できるだけその存在を現わしていかなければいけない。ここに仏教があるんですよということをですね。そうしないと、向こうの方から進んで尋ねて来る

ということは非常に少ないわけです。お互い自分の世界で生きていますから。ですから、そのような「仏教の機会」というものをできるだけ沢山作って、どこかに打ちあたっていただければと言いたい気がします。

(十九) はたらきかける仏

仏教の目標ということをしこし考えてみようと思います。これまで見てきましたように、わかりやすく考えれば、「仏」と「教え」というのがポイントですね。「仏教」の読み方は、「仏となる教え」という読み方が一つできます。それは私が仏となる、その教えが仏教なんだと。これが標準的な読み方と言えるかもしれません。

そうしますと、仏となるというのはどういうことか。そもそも仏とは何か。今、これを分かりやすく、座った仏像と立った仏像で表わしてみましよう。仏像には座った仏像と立った仏像とありますね。どちらも仏像だから変わりはないように思えますが、立つと座るでは言わんとする意味が異なります。同じ仏と言っても二つの側面があることを現わしているわけですね。

座っている仏像は涅槃ねはんを表わします。涅槃は涅槃じゃくじょう寂じやく静じようの世界、正に真実の世界、沈黙の世界ですね。その涅槃の世界から私達を救わんと立ち上がった。立っているというのは立ち上がった姿なんですね。それが立った仏像ですね。涅槃の世界から立ち現われたのが南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏と言っても、阿弥陀仏と言っても実質は同じものです。これを現わすのに立ったものとして現わすわけです。

これは、又、おかしい問いをしますけれど、仏となるということなんですから、涅槃も仏、南無阿弥陀仏も仏、どちらの仏がいいですか？ ということですね。私はかつてはもう圧倒的に涅槃の仏になりたいと思っていました。涅槃寂静の真実そのものの世界の中に何か溶け込んでいくようなね。しかし、浄土真宗という仏教では、何を真実なるものとして讃えるかと言った時に、涅槃の仏ではないんです。南無阿弥陀仏なんですね。涅槃の仏を無視すると言うのではないですよ。涅槃は南無阿弥陀仏の背後にあるものです。直接的に私達は、南無阿弥陀仏を讃えていく、ここにこそ具体的な真実があるんだ、真実のはたらきがあるんだということなんです。

真実とは何か？ という、驚くような問いが経典の中に書いてあります。真実とは何だろうと思ったら、如来なりと言うんですよ。「真実とは如来なり」。如来と言うのは、南無阿弥陀仏のことです。南無阿弥陀仏というのが真実なんだと。私は、涅槃のことを真実と言うのかなと思っていたら、具体的には南無阿弥陀仏なんです。涅槃は動きがない。南無阿弥陀仏は、動いてはたらく力ですね。

涅槃という永遠普遍の真実が、いわば立ち上がって前に出、私の方の向かって来る、その事実をあのような形で現わしている。その仏に私たちが出会っていくのです。ですから、はたらきかけるものに出会って救われたものは、今度は同じように、その人自身が人々にはたらきかけていくんです。伝えていくんです。

仏様が前に立ち上がって私にはたらきかけようとしている、そのはたらきが私の上に成立する。成立したところが信心ですね。そうすると今度は、私自身が立ち上がって、前に向かっていくんです。歩み出していくんです。前と言うのは、何がそこにあるのかと言えば沢山の人がいるわけです。その人達と共に生きていこうというのが大乘なんですね。ですから、この世で何を最も大事なものとして私達は讃えていくか、それによって自分がどのように生きる存在になるかが決まっていくわけです。

私達のご本尊は南無阿弥陀仏なんです。南無阿弥陀仏だということははたらきです。人々に対してはたらいて、その人々を本当に生かしていこうという力ですね。そのようなものが具体的な真実だと。その南無阿弥陀仏というものが明らかになると、私達もまた人々に対して願いを持つ生き方をするようになる。仏教というのは、そのような人を生み出したいんですね。

人間というのはどんな生き物なんだろう、どんな存在なんだろう。それを仏教で言えば、真実の教えによって自己と仏様に目覚めて、自分自身も歩み、縁ある人に対してはたらきかけていく、その願いに生きていく人なんだというわけですね。

そのところまでいって、やっと仏教なんですね。途中で終わったら一寸残念なんですよ。私達の歩みは初めはもちろん第一歩からやっていかないといけないけれども、そこにもいろんな問題があるわけですけども、仏教というのはこのような人を誕生させたいという願があるんですよ。誕生させたいその人間像という

のは、主体的であり、生産的であり、生き生きとしていて、願いに満ちてやっていく人なんですね。

このへんで終わりにさせていただきたいと思います。